コンコンとドアを
ノックして欲しいと願い
仲間と体験談をつづりました

涙のタフラブ

カイ

私の一人娘は今年で三十歳になる。十五歳で非行に走り、未成年の間に二度逮捕された。娘が十六歳で大麻所持で逮捕された時、私は少年院に行かせたくない一心でかけずり回った。娘の人生を守れるのは母親の私以外にないと信じて疑わなかった。そして娘は私の願い通り少年院へ行かずにすんだ。安堵したものの、娘の行動も薬物の使用もエスカレートしていった。毎夜、娘からの電話にいつでも出られるように携帯を握りしめ、服も着替えず、とりあえずベッドに横になる。こちらからの電話を一切無視する娘なのに、朝方「迎えに来て！」と言う電話に怒りながらも飛び出して行く私。「信じている」と言いながら娘の部屋に無断で入り薬物を探す。薬物を止めると言って止めない娘を「嘘つき」と恨んだが私も嘘つきだ。娘のことを信じてなどいなかった。

ある夜、見つけた大麻をトイレに流し、吸引器を捨てるために車で夜道を走った。怖くて、怖くてどこに捨てたらいいのかも分からなかった。さまよい、夜明け前に見つけた川に吸引器を投げ捨てた。「もう嫌だ、こんな人生は嫌だ」と思い切り泣いた。そしてその場で私は人生を変えることを決心した。

助けを探し、自助グループのドアを開けた。それからというもの、自助グループのミーティングはもちろんのこと回復施設の家族会や勉強会、クリニックなど、どこへでも出かけて行った。

孤独だった私がいつもたくさんの仲間と一緒だった。
十九歳　覚醒剤の使用で逮捕。
私は自助グループに繋がっていたし対応の仕方も知っていたのに、まだ私は何とかして少年院へ行かせないために奔走していた。がついに、少年院送致となる。
　二十歳の誕生日を少年院で迎えることになった娘が憐れだった、私自身も憐れだった。一年間の入所。この間、回復施設に繋げるために施設のスタッフの方に協力をしてもらって娘を説得。少年院から家に帰る事なく施設へ入所することを娘は渋々承諾した。少年院から直接施設に行かなければ回復のチャンスを遅らせてしまうことは頭では理解していたが、家に連れて帰って温かい湯船にゆっくり浸からせたかったし、美味しいものもお腹いっぱい食べさせたかった。今でも冬になると、面会で娘の酷く荒れた冷たい手を面会時間が終わるギリギリまでさすって温めたことを思い出す。
　少年院仮退院の日、予定通り回復施設に入所し、ホッとしたのもつかの間、一ヶ月程で暴れて施設にいられなくなってしまった。
　家に引き取って欲しいと言われるがそういうわけにもいかない。施設との長いやりとりの末、なんとか違う施設に移れる事になった。新たな問題もあった。保護観察中は施設にいるが保護観察の期間が終われば施設を出ると言う娘。自分でやっていくと言うが、何か困れば家に帰って来て、もとの生活に戻ってしまうだろう。私と暮らすことは娘の回復を遅らせるだけだ。かといって、娘を家にいれないと言い続ける自信もない。そして私は前々から
※スポンサーに提案されていた引越を決心する。施設にいる娘に電話で引越をすることを伝えた。もちろん行き先は告げない。私は娘を手放した。電話を切った後、ボロボロに泣いた。

お互いの所在もわからないまま月日は過ぎて行く。
いったい、いつまでこんな日々が続くのだろう。
先の見えない不安を日常の忙しさに紛れさせて一日一日を重ねていった。
楽しくて笑っていても、ふと、マイナスな思いに囚われていく。世間の人が私の状況を知ったら何て思うのだろう？
自分が楽になりたくて子供を捨てた母親。娘がどこにいるかもわからないのによく笑っていられるものだと思われるに違いない。
いつも、そう、私は自分の中にある世間を怖れている。問題は自分自身にある。
時折、襲ってくる怖れや不安を仲間に話す事で気持ちを立て直していた。

娘を手放して六年後のある日、一通の手紙が届いた。見慣れた文字、娘からの手紙だ。ドキドキしながら封を切った。一度会って欲しいという内容だった。娘は無事に生きていた！嬉しかった。私たちは再会した。会う前はとても緊張したが「ひさしぶり！」の一言のあとは何事もなかったようにおしゃべりを楽しんだ。これだけ色々なことがあってお互い憎んだり、恨んだり、苦しんでも一瞬にして親子に戻る。親子の絆というのは本当にすごい。娘にごちそうになり、用意してくれていたお土産をもらい、いつも何もかもを取り仕切っていた傲慢な私が全て娘にお任せをした。
別れ際に「ありがとう」と、ずっと伝えたかったことが言えた。「今まで一人でよう頑張ったね。ほんまに偉い」と。
再会して二年経つが娘と私は頻繁に連絡を取るわけでもない。少し寂しかったり、物足り

なかったりもするが、これが今の私と娘の適切な距離なのだ。娘は娘の人生を生きているし、私は私の人生を生きている。

タフラブというと思い出すことがある。幼い頃に観たテレビのドキュメント番組で、盲目の少女の母親が娘に何でも自分でやらせていた。できないと叱咤する。まだ小さいし目も見えないのだからやってあげればいいのに…。とても怖いお母さんに映った。お母さんは「私が死んだらこの子は一人で生きて行かなくてはいけないんです」と強い口調で言っていた。このお母さんは怖いお母さんではなくタフラブを実践する人だったのだ。

タフラブ（手放す愛）の実践は容易いことではない。いくら子供の自立と成長を願っていてもかわいい我が子を何とかしてやりたいし手を貸したい。優しいお母さんでいたい。そんな思いをかなぐり捨てて、「ノー」を言い続ける辛さと恐怖を引き受ける覚悟が必要だ。タフラブは、親にしかできない究極の愛だと私は信じている。

これから先、何が起こるかなんて誰にもわからない。
私にできることは大切な人の無事を祈る事と今日一日を笑顔で過ごすことだけだ。
思い描いた人生など手に入らなかったけれど私は今、幸せだ。
幸せのはじまりは勇気を出して自助グループのドアを開けた日だ。

用語の説明

ハイヤーパワー

自分自身を超えた、自分よりも偉大だと認められる「力」。
薬物依存に無力であるからこそ、自分を超えた大きな力に自分をゆだねている。
その力についてどう解釈するかはまったく各人に自由に任されている。

スポンサー／スポンサーシップ

回復の十二ステッププログラムを実践するにあたり、メンバーはより経験のあるメンバーに相談し、助言や提案を示してもらう。その助言者をスポンサー、その関わりをスポンサーシップと呼んでいる。

回復の十二ステッププログラム

回復のプログラムとして提案されている十二のステップは、スピリチュアル（霊的）な特徴を持つ生きかたの原理。

フェローシップ

本来は仲間の集合体を指すが、ミーティングを離れた仲間同士の交流の意味で使われることが多い。